



# 国際情報

INTERNATIONAL &amp; INFORMATION

新潟国際情報大学広報 第6号

〒950-2292 新潟市みずき野3丁目1番1号 tel 025-239-3111 fax 025-239-3690 E-mail somu@nuis.ac.jp ホームページ http://www.nuis.ac.jp

「心で見なくちゃ、見えないよ」

情報センター長 高瀬 昭治



第 次大戦末期 みずから操縦する偵察機とともに地中海の上空で消息を絶ったフランスの作家サンテグジュペリ……。先日の新聞は、彼と妻の名前を刻んだ腕輪と飛行機の残骸が、この夏、偶然にもマルセイユの沖合いで発見されたと伝えていきます。サンテグジュペリの名で、だれもが思い出すのは、飛行機が不時着したサハラ砂漠でくりひろげられる『星の王子さま』の物語です。

物語のなかで、キツネが王子さまに向かっていいます。「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。肝心なことは、目に見えないんだよ。同じように王子さまも、作者のぼくに向かって、「きみの住んでるところの人たちは、自分たちがなにがほしいのか、わからずにいるんだ。さがしているものは、目ではなにも見えないよ。心でさがさないとね」とさします。

ところで、肝心なことは目には見えない、心で見えない、という言い回しは、私には、「情報とは何か」を考える糸口を与えているように思えます。

「情報の意味は一般にへみえないもの、へみえにくいもの、を、へみえるもの」として明確に経験させてくれるというところにある」と説いたのは見田宗介さんです。私たちは、回りにあるモノや現象に名前を付け、その相互関係を分析することによって、そのモノや現象の見えない本質・法則ともいうべきものを認識することが可能になります。見えないものを、一連の記号を使って、見えるものとして経験する。それが情報化としての認識作用です。

見田さんは、情報を三つの様相に分けて説明します。二が、いまあげた社会や自然を知るための情報、つまり認知情報・知識です。第一は、社会や自然に働きかけるために指示を与えるプログラム、設計・行動情報です。この二つはいずれも何かをするための手段としての情報」です。

私が興味を持つのは、彼が第三の情報としてあげた、「飲む」としての情報」です。これは、何かの手段としての情報ではなく、それ自身が飲むであるような自己充足的な情報です。二例をあげれば、すばらしい絵画や音楽や文学が、その物質的存在を超えて、私たちに直接体験として与えてくれる飲む、つまり美的体験情報がそれです。

魂の深いところで、私たちの知性と感性に至福の飲むを満たしてくれる自己目的的な情報……。手段としての情報にしか目を向けない私たちの貧しい情報観に対して、王子さまが「目では見えないよ。心でさがさないとね」といった何かは、こうした物質主義の彼方にある、魂をゆするような高品質の情報ではなかったのでしょうか。



# 地域交流 活動 について

地域交流委員長

● 渡 辺 忠

地域社会が大学に求めるものは3つあるといわれています。1つは地域住民に門戸を開放すること、2つ目は大学が所有する施設、設備、人材などを地域のために有効に活用すること、3つ目は教育研究の内容を地域社会のニーズに合わせることです。一般に大学はこれらの要求に公開講座、施設の開放、社会人の受け入れ、民間との共同研究、委託研究、委員会や審議会への参加などの活動を通して応えています。

さて、当大学も開学以来、講演会、公民館活動の支援、公開講義、ウーマン・カレッジへの協力、マルチメディア・フェスティバルへの参加、インターネット講習会の開催などにより地域との連携を深めてきました。今年度はこれらに加えて公開講座「情報文化入門」を始めました。また情報センターは図書室を一般に開放しようとしています。交流活動は着実に実績を積み重ねているように見えます。しかし、社会人の受け入れについては、入学制度、聴講生制度は整っていますが入学実績はわずかです。施設の開放も緒についたばかりです。共同研究も教員個人またはグループのレベルにとどまっています。大学開放にとまなう管理や経費の問題も障害になっています。

少子化による入学者の減少は避けられないでしょう。また放送大学や、インターネット等の普及は大学以外のところで高等教育を習得する可能性を増やしています。しかし、一方では高等教育の普遍化、生涯学習の高度化、多様な経済活動を支える知識基盤の必要性など社会はますます高度な教育を必要としています。大学は地域社会のニーズを的確にと

らえ、地域に貢献する存在になることが求められているのです。そこに地域交流活動の意義があります。

## 公開講座「情報文化入門」を50名が受講

本学は10月8日から7回の日程で公開講座「情報文化入門」（木曜、午後7:00～9:00）を万代市民会館で開いた。本学の学部名でもある「情報文化」を地域の人々に理解してもらい、大学の存在意義をアピールすることが目的である。情報文化を説明するには情報技術が生み出す文化という視点で語ると理解が容易である。そこで「生活の中の情報技術」という副題をつけて、情報システム学科の先生方が講師を分担した。

全7回の内容と講師は次のとおり。

第1回	資源としての情報	高木 義和
第2回	21世紀はネットワーク社会	永井 武
第3回	インターネット社会の光と影	宗澤 拓郎
第4回	生き残りをかけた情報システム	竹並 輝之
第5回	人に優しい情報機器	大山 毅
第6回	身近な人工知能	樋口 光明
第7回	仮想世界のルーツ	渡辺 忠

40名の募集定員に対して、50名を超える市民の応募があり盛況であった。



## 「情報システム特論」を市民に公開

情報システム学科3年向け講義である「情報システム特論」を公開講義として市民にも開放した。こ

の講義は、情報システムに関する最新の動向を、実社会で活躍している人を講師として話してもらうもので、9月から11月にかけて土曜日に4回開かれた。毎回15名程の一般社会人の参加があった。

講義内容は、「システム構築管理」松平和也（フラインド）、「経営と情報システム」過去、現在、未来「岡本行二（東芝情報システム）、「県内企業の情報化実態とインターネット活用」佐藤実（新潟ソフトウェアセンター）渡邊清史（中小企業診断士）、「薬局基幹情報システムの実例」水野善朗（水野薬局）。

## ウーマン・カレッジ 開催で地域と連携

「ウーマン・カレッジ」は女性の社会参加を応援する事業の環として新潟県内各地で開催されてきた連続講座である。主に社会人の女性を対象としているが、学生でも男性でも参加できる。新潟県教育委員会が主催しており、地域ごとに結成された運営委員会が自主的に立案・運営している。一九九七年度から開催されている「ウーマン・カレッジ in 西蒲・燕」は三十回の講義を三年計画で行うもので、新潟市西部から燕市にかけての地域と大学の密着な連携をはかることも目的とされている。本年度は、6月から11月にかけて、土曜日に10回本学大教室で実施された。メインテーマとして「今、変わるとき、変えるとき」と掲げ、既存の男女のパートナーシップを女性学の視点から見つめなおすための講義を組んでいる。講義のほぼ半数を本学の専任教員が担当し、他は各分野の研究者や専門家を学外から招聘している。参加者は二年目から二五〇名を超え、専門的な内容にもかかわらず、講義の後半は常に活発な質疑応答の時間となっている。

## 産学交流の 視察 会 施 実

新潟市が産学交流事業として進めている大学の視察会が11月11日、本学で開かれた。企業関係者や一般市民ら約三十人が参加、パソコン関連の施設など、ふだんは見ることのできない大学構内を見学した。

視察会は企業と地元の大学が協力し、技術の高度化や製品開発を進める産学交流事業の一環。視察会では、石川真澄情報文化学部長が「少子高齢化が進み、すべての学生が入学できる大学全入時代がやってくる。学生が大学を選ぶようになるので、個性的な大学が必要となる」と大学の展望を示した。続いて竹並輝之同学部教授が「ネットワーク時代の管理者」と題して講演。電子メールの普及により、企業では、役職の上下に関係なく情報を共有化している。上司と部下をつなぐだけの中間管理者は不必要となり、管理者には、新たな管理能力が求められる」と講演した。

## 懇談会は名刺交換会

11月4日（水）、企業との就職懇談会が新潟市のホテルにおいて190の企業から213名が参加され盛大に開催されました。

大学からも学長、学部長、就職指導委員はじめ多くの教職員が出席、広い懇談会場では「ガラスを片手に」する間もなく、「名刺を片手に」いたるところで教職員が企業の人事担当者や真剣に話し合う姿が見られました。

不況による採用の手控え等厳しい話題の多い方、少数精鋭を本学の学生に期待する声も聞かれました。兎に角、「全てに積極的」な人間を求めていることは、間違いないようでした。

# 5 開 学 周年記念 講 演 会

## e-ビジネスと 企業経営 (要約)

日本アイ・ビー・エム(株)

代表取締役社長  
**北城 悟 太 郎**

う進めるか、また個人が快適な生活を送れるようにするにはどうしたら良いのかを考える時代であるといえます。これは従来と根本的な違いであり、産業界にビッグバンをもたらすものだと思います。それでは、ネットワークを利用した新しいビジネスがどう展開しているのか、いくつかの事例をもとにお話しします。

e-ビジネスとは、エレクトロニック・ビジネスのことです。本日は、インターネットのようなネットワークを使って、どう企業経営を変えて行くかということをお話ししたいと思います。まず、e-ビジネスとはどんな仕事の進め方なのかをお話しし、次にそれによりどのような事業改革が行われるのか、それを支える情報技術はどのようなものをお話しします。

工業化社会の進展のなかからデジタル革命が起こり、さらに新しい情報化社会が始まろうとしています。情報を企業活動、あるいは個人の生活のなかに活かしていく社会、いつでも、どこでも、だれでも情報に接することのできる社会が情報化社会です。この時代の新しいきっかけを作っているのがインターネットです。インターネット接続のコンピュータは、毎年倍増しており、現在3000万台以上が接続されています。利用者数でいえば、5000万人を超えるでしょう。この新しいメディアは、すでに社会基盤になるうとしています。ラジオが5000万台に達するのに38年かかり、テレビは12～13年かかりました。インターネットは5年でここまで来ました。メディアが社会に大きな影響を与えるレベルは、5000万台だといわれています。まもなく、会社、銀行、商店、家庭などいろいろなところでネットワークが使われ、ネットワークが前提となった社会がやってくるでしょう。

企業にとつても、大きな影響があります。今までは、すでに企業内に存在する仕事を、いかに効率よく、早く、安く行つかに情報技術が使われてきました。これからは、すでにネットワークがあり、それにつながったパソコンを多くの人が使っていることを前提にして、ネットワークを使った新しいビジネスをど

まず、個人を対象にした電子商取引の事例です。

海外では、アマゾン社の書籍販売、e-トレード社の株式売買、オートバイ社社の自動車販売などが成功事例です。インターネットのホームページを使った電子商取引では、店舗や場所、時間に制約されない、世界中を相手にできる、豊富な情報提供と素早い情報伝播ができる、販売コストがかからないので安く提供できるといった利点がありますが、ただホームページを開設すれば売れるというものではありません。これらの各社とも、利用者に付加価値を与えるようさまざまな工夫をしています。日本でも、ホテルオークラの客室予約、日本航空の航空券販売、アスクルの事務用品販売、セイノールの荷物追跡、ローソンのカタログ販売などの事例が出てきています。日本では14

00万人がすでにネットワークを使っています。特に、若い人の世代になれば、どんな利用が進むでしょう。

企業間の電子商取引も進



んでいます。これをエクストラネットと言います。G Eは、インターネットで部品調達を行うことにより、購買コストの削減に成功しています。クライスラーでは、設計情報を開示して調達先に改善提案を求めています。こうすることにより、仮想企業集団ができ上がる効果も期待されています。サプライチェーンマネジメントといつて、メーカーが、小売業における自社製品の販売在庫情報を、ネットを通じて刻々と把握することにより、適切な生産計画を作り、在庫回転率を上げる方式が新しい流れですが、これもネットワークがあればこそ可能になったといえます。

社内業務のネットワーク、すなわちイントラネットにも大きな変化が生じてきました。IBMの事例でお話しします。IBMでは、10年前に電子メールを導入し、情報伝達のスピードアップに効果を発揮してきました。さらにチームでの仕事の効率を上げるために、1995年にグループウェア(ロータスノーツ)を導入しました。これによりグループ全員に簡単に情報を伝えることができるようになり、情報の共有が進み、また部門を移っていく仕事の決裁やプロセス管理もできるようになり、電子会議で会議の生産性が上がるなどの効果も出てきました。さらにこのイントラネットのもとで、営業マンにノートパソコンと携帯電話をもたせ、会社に来ないで、自宅でも客先でも、サテライトオフィスでも仕事をしようというモバイルオフィスを進めています。これを実現するためには、仕事に必要なすべての情報は、ネットワークを通して自分のパソコンに送られるという仕組みが必要になります。これで、営業マンが客先を訪問する時間が3割向上しました。このように、ネットワークに適した仕事の仕方をしないと社内の風通しは良くならないし、ヘッドアップもできません。社内の風通しを良くしようという文化や、仕事の仕組はどんどん変えても良いという社風がないと、いくら電子的システムがあっても会社は変わりません。一方、いくら社風があっても、うまくシステムがないと会社は変えられません。

次に、e-ビジネスを支える情報技術を紹介します。

ネットワークを通して大量に発生するデータのなかから、いかに価値のある情報を取り出すかが重要です。大量のデータの分析に人工知能を利用する研究や取り引き履歴を統計的に分析し、ワンツーワンマーケティングを可能にするデータマイニングの研究が進んでいます。バーベシフコンピュータリングといつて、家電、VODなどいたるところ、あらゆるものをネットワークにつなげる技術、パソコンをだれにも使える道具にする音声認識、体に装着できるウェアラブルパソコンの研究なども急速に進んでいます。

日本でもネットワーク社会が着実に広がってきていますが、いくつかの課題もあります。通信回線の低価格化、暗号化などのセキュリティ技術の確立、ハッカー対策の強化などの問題がありますが、インターネットを多くの人が使い出して、これが社会に大きな影響を与えるのは、あと数年のことだと思います。そうすると、ネットワークの存在が市場になります。経営者は、ネットワークを使ってどういう仕事を考えるか考えねばなりません。これは経営革新です。これができるか、新しい時代の変化をチャンスとして生かすことはできないでしょう。異業種の新規事業に参入することは、ゴールドラッシュで金を掘当てるぐらい難しいと思います。それよりも本業の分野で、ネットワークを使っていかに経営を強化するか、新しい市場を拡大するか、業態をどう変えるかが新しい経営課題だと思います。将来どう変化するかは、なかなか判りません。したがって、変化の兆しを見つけた時に、いかに早く行動できるかが今後の企業の競争力になるのではないのでしょうか。今後の企業に求められるのは、経営のスピードであり、それを支えるものは情報技術ではないかと思っています。(本稿は、10月30日に万代市民会館で約280名の参加を得て行われた開学5周年記念講演会の講演要約です。文責：広報委員長)

# 外習記 学実体験

## 「実践的な知識を体得」

情報システム学科3年 木戸 本晴  
(実習先・新潟市立図書館)

私が私の参加した学外実習の内容を振り返るとき、私は常に大きな反省をしなければならなりません。私は学外実習の受入先である新潟市立図書館より、図書館のオンラインシステムのモデルの作成を実習の課題としていただきました。私は情報システム学科の学生としてこうした問題について多くの知識を学んできましたが、この課題の作成に当たって体として良いのか全く見当が付きませんでした。学んだ知識と現実と存在するシステムとをつきあわせることを怠り、ただ漫然と講義を受け入れてきたためであつたと思います。

我々学生というものは、純粋な学習の場としての大学に身を置いているため、一般に実際の活動と乖離しがちになり易いという傾向があるように思われます。我々の多くは社会における企業活動などに直接触れることが少なく、あつたとしてもその多くはアルバイト等のごく限定された形での接触に留まっています。従って、私が今年参加した学外実習は、企業活動への直接の参加、接触という体験を通じて、その事実を認識させ、より実践的な知識を体得する必要性とそのための方向性に対して目を開かせてくれた貴重な学習の機会であつたと考えています。

## 「学外実習を振り返って」

情報システム学科3年 野村美由紀  
(実習先・新潟交通)

私の実習先は新潟交通でした。実習内容は、実習期間の2週間、新潟空港へ行き、アンケートをとり、それをレポートにまとめるといったものでした。簡

単なようですが、実際、大変な仕事でした。知らない人として、どのようにコミュニケーションをとり、アンケートに答えてもらうのか。慣れるまで時間もかかりましたが、普段、なかなか経験のできるものではないので、終わってみると充実した2週間でした。その後のレポート作成も、今まで習得したものを十分生かせるものでした。また、就職という卒業後の進路について、不安でいっぱいでしたが、実習に行つたことで、少し不安が取り除けたように思います。行き先により、実習内容も異なり、そこで得るものも違うとは思いますが、企業の雰囲気を感じ、仕事とは何か、働くとはどういうことかなどを知り、経験することは、必ず自分のためになるはずです。私にとって、学外実習は良い経験となりました。

## 「味の素の味」

情報システム学科3年 山田 一洋  
(実習先・味の素)

私は平成10年8月3日～8月14日までの2週間、横浜の川崎市に所在する味の素(株)川崎工場の生産技術研究所に研修生としてお世話になりました。川崎工場は大規模な施設で味の素やほんだしなどが生産されていて、多くの人が働いていました。私が研修した生産技術研究所では工場内の情報システムの運営や工場・従業員の管理などの業務が行われていました。

私の研修2週間はあつたという間でした。最初の1週間は工場内・外の施設見学をしました。ほんだしが出るまでの過程や新商品を開発するための実験室などを見せてもらいました。また、残りの1週間は実際の業務の補助的な手伝いをしたり、会議等に出席させていただき、会社のしくみを体験することができました。また、最終日に研修の結果報告をプレゼンテーション形式で行わせてもらい人前に出たの話し方などを学ばせていただきました。

この他にも、社員の方々から貴重なお話を聞いて自分の就職についての方向性などを知ることが出来ました。このように私の学外実習はとても実のあるもので、普段体験できない素晴らしい体験でした。

## 「学外実習を振り返って」

情報システム学科3年 田沢 葉子  
(実習先・新潟商工会議所)

私は商工会議所の業務を検定試験以外知らず、とても興味を持ったので実習先に商工会議所を選びました。

2週間の実習を終え、商工会議所の今まで知らなかった多くの業務について知ることができました。2週間とはいえ初めて知ることばかりで1日1日があつという間に過ぎました。中でも調査課で会議を見学できたこと、受付業務を体験できたことはとてもよい経験になったと思います。また、女性の職員の方々が何度もお茶やコーヒーを出して下さった事に少し驚きました。しかし、一般企業では当り前のことのように、このことも含め実際に就職する前にこのような経験ができ、とても有意義な2週間でした。

また、大学では学べることのないこのような実習体験を通じて大学で習得したものを実際の職場で発揮できるかを確認し、職業人、社会人としての自覚を身につけることを目的としたこの学外実習に参加して良かったと思います。

## 「出版社の仕事」

情報システム学科3年 渡部 浩嘉  
(実習先・博進堂)

私は、今年の夏に学外実習として、新潟市にある博進堂という会社に行きました。この会社は出版、印刷をおこない、その他にも、様々なイベント企画／運営をしています。この会社の出版物のついに、学校の卒業アルバムがあります。卒業アルバムについては、全国でシェア1位を占めており、もつとも力をいれている仕事なので卒業アルバム専門の制作部もありました。以前から、出版の仕事に興味をもっていたこともあつたので、私はそこで、出版の仕事がどのように行われているのかを学びたいと思いました。

新潟にいくつかある博進堂の事務所の中で、私が派遣された先は、博進堂「コミュニケーション事業部」という所でした。私はいままで、出版の仕事について、出版物を印刷するだけだと思っていました。ただ、出版では会社を運営していくことはできないということでした。博進堂は、イベントの企画／運営もしているといいますが、この企画という仕事について、私は何も知りませんでした。企画とは、何もないとすると、何かを産み出すことです。そこに勤める人達は、たくさん企画をたてて、それを実現させて、企業の利益に結び付けることを目指していました。

## 一足早く社会を学ぶ ～国際情報大生、当所で実習体験～

学校では学べることのできない実習体験を通して学校で習得したものを実際の職場で発揮できるかを確認し、職業人としての自覚を身に付けることを目的とするインターンシップ制度の導入例が増加しています。



新潟国際情報大学では、地域社会や産業界との積極的な交流を推進する中で特色ある学校作りの一環としてインターンシップに取り組んでおり、8月17日～28日の2週間、公的機関や企業等において約30名の学生が、夏期学外実習として実施しました。

当所の受入れは、今年で3回目となり、今年は本人の希望により同大学情報文化学部・情報システム学科3年生の田沢葉子さんが実習しました。

実習後の感想は「商工会議所の業務は検定試験以外知らなかった。初めて知る事が多く、とても良い経験でした」とのことでした。

## 「長靴をはかなかった私」

情報システム学科3年 田村 恵  
(実習先・日本海水産研究所)

私は、水産庁の研究所である「日本海水産研究所」といつごろに、約2週間実習に行ってきました。実習に行く以前、私はこの研究所が一体どのような活動をしているのか、全く知りませんでした。ただ名前から察するに、「魚の研究でもしているのだろ」と思い、いくつもの水槽の中で、魚が飼育されていて、その周りを白衣を着た研究者達が、三角フラスコでも持ちながら、私などでは全く計り知れない超専門的な研究に動んでいるのだろ、と思っていました。正直、「情報処理の実態」という、実習目的とは、なんの関連性もないのではないかと不安に思ったものです。「私服で大丈夫かな? 長靴持ってきて下さい、なんて言われてないしなあ...」半ば、魚市場に行くような感覚で、研究所に足を踏み入れた私は、面食らっていました。

私が研究所で行った実習を挙げると、気象衛生「NOA」受信システム、NPS-1画像処理、NOA画像のホームページ化、等温・海況模式図作成(DOS画面にて操作)、統計的情報処理、データ入力と年齢判断、魚体の体長のデータベース作成、図書検索などです。

実習としては十分すぎる位中身の濃い内容でした。おまけに、毎日担当の方が付いて、丁寧に教えてくれるのです。担当の方はどなたも本当に良い方ばかりで、実習の最終日には、お別れが寂しく感じました。

来年、学外実習を希望する学生にも、是非日本海水産所で実習してもらいたいと思います。今我々が学んでいる知識が、社会でどのように使われているのか、身を持って体験できることではないでしょうか。

## 「自分を見つめ直すことができた」

情報システム学科3年 土田 和幸  
(実習先・東芝ホームテク)

私はこの2年半の間、これといった目標もなかった。漠然と勉強してきたような気がしてならなかった。

しかし自分の心の中では、このままではいけないという気持ちがあった。そんな時、ちょうど学外実習があり、実社会への好奇心と自分を変えるきっかけになればと思い参加した。私は1日目にして、実社会の企業の厳しさや、いかに今の自分に力がないかということを感じ知らされた。今まで本当に時間を無駄にしていたような気がして悲しかった。しかし、大学を卒業してすぐに仕事ができるわけではなく、企業で二つ三つ勉強して一人前へと行って行くのだと企業の方に言われ少しホッとした。

学外実習を終え、やっと自分の進むべき道が定まってきた。卒業までの残りの時間を大切に精一杯がんばって行こうと思う。本当に良い経験をすることができた。

## 新潟国際情報大学奨学生決まる

この度本学の奨学生が次の通り決まりました。この制度は学業のみならず、課外活動等の活躍、また卒業後も同窓生として活躍が期待できると思われる2年次以上の学生を対象に教職員の推薦により決まるものです。

4年次生 情報文化学科 川上洋子、黒崎貴多、櫻井万智子  
情報システム学科 井上舞、清水愛子  
3年次生 情報文化学科 佐々木克、山際敦  
情報システム学科 小林久徒、山口潤、山田洋  
2年次生 情報システム学科 梅田武志、菊池大

## TOEICおよび中国語検定試験、本学に於て実施

本学では、英語コミュニケーション能力テストであるTOEICの特別受験(団体として割安な料金で受験できる制度)を行っている。本年度は、11月5日(土)に実施し、昨年度(66名)を上回る73名の学生が参加した。

また、11月15日(日)には、本学の試験場で中国語検定試験を実施した。25名の参加者があり、それぞれ準2級・3級・4級・準4級の試験を受けた。

## 卒業生の便

先生お元気ですか? 連絡が遅くなりました。申し訳なく思っております。本日より、やっと自分のメールアドレスを保持することができました。

(といっても会社ですが。)

さて、近況報告ですが、私は現在、芝通新潟事業所でdMAG-ICというツールを使って、主に企業の販売管理システムの印刷処理プログラムの開発を担当しております。恐らく今年一杯は、印刷などのバッチ処理プログラムの開発がメインになると思います。dMAG-ICは、C言語やVBと違い、コードの記述がほとんどありません。その代わり、どういった風に処理が流れているのか、目でコードを追うことができないので、C言語やVBしか扱ったことがない人には少々抵抗があるかもしれません。まだまだ、分からないことばかりですが、幸いにも、新潟事業所には大変優れた技術と知識を持った先輩方がおられるので、がんばるしかないという感じです。先生も体に気を付けてがんばってください。では、またメールします。

(芝通勤務 横山祐樹)

私は今、大学を卒業し営業職に就いています。一見大学で学んだことに直接関係していないと思われるのですが、そこではありません。確かに、講義の内容は今の仕事に直接関係していないものもあるかと思いますが、何より新潟国際情報大学では、聴いているだけの講義ではなく、数人で集まり何かについて討論しあったり、またその結果をいかに分かりやすく発表するか、また、ただPCを学ぶのだけではなく、実際にPCを使って何をやるかということや、学がことができたので、社会人になった今、とても役に立っています。

(新潟セロックス勤務 渡部康)

御元気ですか。学生のころはお世話になりました。7月1日をもって正社員になりました。現在はエアコンの製品学習や営業の見積、パン

コンの操作など勉強が非常に大変な状態です。会社によりやく電子メールがはいりましたのでご連絡まで今回は失礼いたします。

(富士電機総務 林 公市)

こんにちは、清水です。

部長がメールすると言っていたので、もうご存知かも知れませんが、配属の辞令を受けて5月18日から東芝の青梅工場に勤務しています。遠い。配属されて1週間しか過ぎていないので、まだ何もわからないですけど、なんとか病気にもならず元気にやっています。一人暮らしにもだいぶ慣れました。こちらに来る用事があった時には、ぜひいらついで下さい。

7月26日(日)から8連休で新潟に帰るつもりなのでこちらから行くかも。では、お元気。

(東芝システム開発勤務 清水 公春)

現在、私は第印刷所の営業開発部に所属しています。毎日、パソコンの前に座って仕事していますが、環境的には学時代とさほど変わらない、といったところでしょうか。

まだ入社したばかりなので、状況的には自分の方向性を試行錯誤している段階かな、と自分では思っています。

実際に入社してみて、感じたことなのですが、学生であつた頃に私が感じていた社会と実際の社会の様子は少し違つ様です。

いまは手探りのようにOL(?)生活を送っていますが、ほかにいろいろなことを感じることが出来るように勉強していきたいと思っています。

(第印刷所勤務 北原 理恵)

昨年度情報文化学科卒業生で現在韓国の延世大学語学堂で韓国語を学んでいる小林江里奈さんがこの度韓国語大学大学院修士課程(日韓・日文学科語学系)の入試に合格しました。

また、情報システム学科卒業生で、本学研究生の三條知美さんが慶応義塾大学大学院修士課程「理工学専攻」の入試に合格しました。

# ホームページの刷新

このたび、本学のホームページを刷新しました。今までは一部の教職員のボランティアによって、主に学内向けに運営されていましたが、それを今回大学の公式な公報メディアの一つとして充実させるようにしました。今後WEBを通じて、学外へさまざまな情報を発信していく予定です。

そのためまずHeadlinesを設け、そこに特に重要な出来事やお知らせを随時載せていくことにしました。たとえば公開講座のお知らせなど、通常の大学に必ずある項目だけでなく、本学の各種クラブの活躍などもこのHeadlinesに入れています。また校友会のページや卒業論文データベースなどをトップページにリンクして、学生の活躍の一端が分かるようにしました。本学の卒業生や父兄の皆様だけでなく、本学の受験を考えたところにいる受験生にとっても、大学の雰囲気や分かるようなページになっているのではと自負しています。今後、さらに充実したページ作りを進めていきたいとおもいます。是非本学のホームページをご覧になって、さまざまな意見をお寄せくださるようお願いいたします。

(本学ホームページに関するご意見・ご提案は、  
nuis@nuis.ac.jp, takenami@nuis.ac.jpまでお願ひします。)(広報委員会)



URL: <http://www.nuis.ac.jp/>

# AFS留学生との交流

11月9日から13日までの1週間、AFS新潟支部からの要請でAFS留学生生ジョアンさん以下8名(オーストラリア4名、アメリカ2名、ドイツ、タイ、ロシア各1名)が、本学において学生パートナーの協力のもとに、授業・演習の参観、パソコン実習への参加、学生と交流等の体験学習を行った。AFSとは、世界各国で高校生や教師の交換留学など、さまざまな異文化交流事業を実施している国際的な民間団体であり、現在、世界55の国と地域が加盟し、約10万人のボランティアにより年間1万人の交流を実施している。AFS日本協会では、現在20数か国から約3000人の高校生を受け入れ、またそれらの国へ約7000人の高校生を派遣しているが、派遣にいくらか受け入れが少なくないという指摘もある。



# 教員の活動

## 「鷲尾教授が韓国で招待講演」

韓国のKangnam大学(江南大学、ソウル郊外)の設立50周年記念行事として国際シンポジウムが10月に開催され、日本から情報システム学科鷲尾泰俊教授が招待され基調講演を行った。シンポジウムのテーマは「企業の競争力を高める

ための総合品質と情報」であり、鷲尾教授は「Innovation of TQM/TQC」と題し、今後のきびしい国際競争のなかで、これからのTQM/TQC(総合的品質管理)はどこを変えていかなければならないか、どこを強化していかなければならないかについて講演した。また、同大学の産業工学科の学生に対して講義と対話を行った。

## 「蔡教授が国際シンポジウムで発表」

情報文化学科蔡建國教授は、8月20日から24日に開かれた中国史学会と北京大学共同主催の「戊戌維新百年国際シンポジウム」において研究発表を行った。また9月19、20日上海で、中日共催の「現代中国構造変動と中日関係国際学術討論会」で司会を行い、9月21、22日上海社会科学院主催の「中国都市発展と社会経済国際シンポジウム」に「メンターを務め、また、上海社会科学学院の特約教授として、当院設立40周年の記念行事にも出席した。

## 「稲宮教授が米国で学会発表」

情報システム学科稲宮健一教授は、9月15～9月18日に、テネシー州ナッシュビルで米国航行学会(Institute of Navigation)が主催するION GPS98に出席し、論文の発表を行いました。GPS(Global Positioning System)は米国が誇る、地球上のどこでも、誰でもこの衛星から電波を受けて高精度に自分の位置を計測できるシステムです。日本ではカーナビへの応用が身近な例です。学会には世界中から専門家が約2000人集まりました。

GPSの次世代の航行衛星システムを論議する分科会「A Study on the Navigation and communication satellite System for the Next Generation」と題する将来の航行衛星に適した衛星の宇宙空間での配置に関する論文を報告しました。

## 「松崎教授が国際数学者会議に出席」

8月18日から27日までベルリン工科大学で開かれた国際数学者会議に、情報システム学科松崎奈岐教授が出席して多くの数学者と交流した。96カ国から凡そ3500人の数学者が集まった。4年に一度開かれるこの会議での大きなイベントは、数学のノー

ベル賞ともいわれるフィールズ賞の授与式である。今年の受賞者は、T・グロウワー等欧米の数学者4名で、その内容は、解析、代数の諸分野にまたがり、当初のうわさ通りのものであった。かつて日本では3名の受賞者を出している。また、多くのセッションにわかれて、レクチャー、討議が行われたが、ナチスの過去(ユダヤ系数学者の追放144人に及び)から脱却するべくこの会議によせるドイツの熱意は、相当なものであった。

## 「原口教授、西アフリカで調査」

情報文化学科原口武彦教授は、文部省科学研究費補助金(国際学術研究)によって編成された調査団の一員として9月5日から22日、西アフリカのコートジボワール、フランスを歴訪した。現地では、資料収集・聞き取り調査を行うと共に、コートジボワール国立大学との共催のセミナーで、「アフリカの政治的民主化と部族——コートジボワールの事例」と題する研究発表を行った。

## 「知識ベースソフトウェア工学国際会議」

情報システム学科樋口光明助教授は、9月9日から11日にスロバキア共和国で開かれた、第3回知識ベースソフトウェア工学国際会議に出席した。この会議は、主として旧東欧と日本の人工知能関係の研究者が中心になって、2年に一度開催されている。発表された内容は、「自動ソフトウェアデザイン」から、「プログラムパラダイム」、「知識獲得」まで、かなり広い範囲であった。

## 「永井教授がパネリスト」

11月20日(金)、ホテルイタリア軒において、新潟市ソフトウェア産業協議会主催の、情報化フォーラム'98「インターネット社会の可能性と課題」が開かれた。本学非常勤講師の原敏明氏(新潟経済社会リサーチセンター理事)の基調講演、「インターネットが創り出すエンターテインメント・インターネットの世界」につづき、情報システム学科永井教授が、パネリストスカッション「新潟から世界へ世界から新潟へ」インターネットからの取り組み方」のパネリストを務めた。

## 軟式野球部 全国大会へ躍進

創部五年目にして見事、開花したというべきか、本年度のわが軟式野球部の活躍はめざましかった。春の新潟地区大会で優勝し出場した夏の全国大会では、強豪帝京大学を破り、次の高松大学戦は、延長の末、サドンデス特別ルールで4対7で惜敗したものの見事、全国ベスト8の栄冠をかちとった。

秋期新潟地区大会でも、破竹の勢いはとまらず、地区内8チームを総ナメにし、うち、敬和太、薬科大、新大医学部との3試合は、いずれも7回コールドゲームという圧勝ぶりであった。講義の出欠がきびしく、専用の球場もないために練習もままならぬわがチームではあるが、投打の要、中野—米沢バッテリーを中心にチームはよくまとまっていた。四番米沢のこの大会での柵越えホームラン4本は、大会史に残る記録であろう。

続いて新潟地区代表として三年連続で出場することになった東日本大会では、初戦で強豪創価大と対戦、9対3で敗れはしたものの、敵の猛打に早々に潰れたエース中野を継投した二年生の遠藤が、強豪打線を4回からピシヤリ完封したことは、来年度以降への明るい兆しとなった。こうしてわがチームの伝統も徐々に築かれつつある。



## “紅翔祭盛り上がる”

今年度の紅翔祭は、一国際5年目の開設—というスローガンのもと、10月24日(土)、25日(日)の2日間、にわたり開かれた。メインイベントとして筑紫哲哉氏の「多事争論」、嶋岡健治氏の「パレーボールと私」の2つの講演があり満員の盛況であった。年々新しいイベントも増え、学生自らの手による運営が定着化していることは頼もしい限りである。

## 紅翔祭を終えて

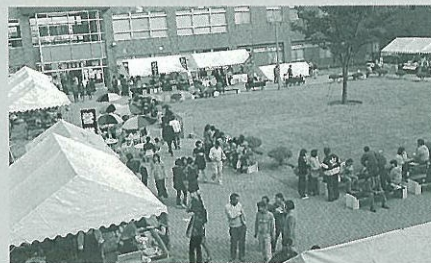
第5回紅翔祭  
実行委員長

●

情報文化学科3年 穀  
長谷川

私は紅翔祭の準備段階で、いろいろなことを考える機会がたびたびあった。その中の一つに「学生にとって学園祭とは何なのか」という疑問である。学園祭で何かイベントをするわけでもなく、興味もほとんどない学生にとっては準備、後片付けの日を含めて4日間のうれしい連休となるであろう。しかし、これは非常にもったいないことだと思つた。少しでも良いので、イベントの手伝いをしてみたい、

自分を中心となり、一つのイベントをやってみるのも良いだろう。そこまでできぬなら「当日」、お客さんという立場で、自分の学校の生徒が何をして



いるのか見に行ってみるだけでも良い。全くのノータッチでこの一大イベントを終えてしまっている学生はそこで大きな「損失」を出してしまっていることに気づいてほしい。

学園祭だけに限らず、普段の講義以外の勉強といつのは大学4年間にいくつでも転がっている。それを探し出し、とりあえず一生懸命やってみることが必要だと思つた。その中で、友人の良いところを見つかけたり、逆に弱いところを見つかけたりするだろう。他人のと交渉の仕方を身をもって覚えるだろう。これからの社会にでて最低限必要なことも、身につけることができる。自分がいっただういふ人間なのか考える機会もでる。

## 教員の出版物

王曙光・杜進・區建英等共著  
「最新教科書 現代中国」  
柏書房、1998年4月第刷、同年10月第2刷

執筆者によつて、歴史・政治・経済・社会・文化を含む現代中国の全体像が描かれた本です。本書の中で、「はじめに」、「中華帝国の崩壊」、「近代国家への歩み」の諸節を担当しました。第1刷が発行された後、好意的な書評が方々から寄せられました。ナショナリズムが見られず、事実を淡々と述べ、地に付いた見解を表わしているといふところが評価されています。

### 明石欽司著

「Cornelius van Bynkershoek: His Role in the History of International Law」(Kluwer Law International, The Hague, London, Boston, 1998) (英語)

十八世紀前半に活躍したオランダの法学者バインケルスフークの国際法理論を多面的に論じたものです。ユトレヒト大学に提出した学位請求論文を増補・改訂し、公刊しました。

### 石川真澄著

「いま、政党とは何か」

岩波ブックレット454 1998年7月

ここ2、3年の政党の結成・解消の動きを整理したうえで、そもそも政党とは何か、明治期の自由民権運動に溯つて検証し、今の政党の有権者との距離、今後の政党のあり方などを論じています。

## 韓国フェスティバルと第1回韓国・朝鮮語スピーチコンテストに参加

2002年ワールドカップ日韓共催に向けて、新潟市は10月10、11日の両日「韓国フェスティバル」を開催しました。この催しの一つとして、韓国と交流している13団体は活動内容をパネルにまとめNEXT21の1階で紹介しました。本学のコア研究会も目黒彦君(情報文化学科3年)を中心にこれに参加し、海外研修や学園祭での活動内容を展示しました。

また、10月10日には併催イベントとして「第1回韓国・朝鮮語スピーチコンテスト」が新潟市民プラザ(NEXT21)で開催されました。これは、本学、県立女子短期大学、新潟大学、市民団体、新潟市など6団体で結成した実行委員会が主催するものです。日本海沿岸では初のスピーチコンテストに対する市民の反応は高く、第一部には24名、第二部には3名の出場者がありました。審査の結果本学の川上洋子さん(情報文化学科4年)が1部の奨励賞(第3位)を受賞しました。

# 韓国語研修訪問記

恨(ハン)の文化～  
韓国・全北大学での  
韓国語研修

情報文化学科4年

●  
長谷川 竜治

私は7月27日から8月8日までの12日間、韓国の全北(チヨングク)大学で開催された韓国語研修に参加した。これは全北大学が主催し、日韓文化交流基金が後援するもので、研修には日本各地の15大学から33名の大学生が集まった。本学からは私の他に、情報文化学科4年の野崎愛さん、川上洋子さんも一緒に参加した。

全北大学は全羅北道の全州(チヨンジウ)にある国立大学だ。この研修では、午前に会話と特別講義、午後5時半まで韓国の文化体験(陶磁器作りや、仮面劇鑑賞など)とびっちり勉強する。さらに、夜は韓国人の学生たちと学外へ行き、夜の韓国語研修(っ)をみっちり積んだ。中でも、夜の研修が楽しく、一番身についた。

研修中、私は「ハンの文化」について感じるものがあつた。ハンとは韓国語で恨みのこと、韓国は「ハンの文化の国」ともいわれている。この言葉は知っているも、若者の間ではもう希薄になっているだろうと思っていた。しかし、そうではなかった。

友人にムルッゲという学生がいた。彼はアルバイトで大学の寮の管理人をしていた。一緒に飲みに行く約束の日、ちょうど寮の知人の誕生日と重なり、彼の誕生会があつた。この知人とムルッゲは友人だったので、私は彼が「一緒に飲む」と言つたのはこの集まりと思つた。しかし、ムルッゲは来なかつた。翌日、彼は「約束を破つた」といって怒つた。私がどんなに謝つても、彼は怒つたままだつた。すると、彼は突然「これから飲みにいこう」といった。時計を見れば、午後11時半。それから朝の5時まで外で飲み、歌つて、さ

らに寮で飲み続けた。この時ムルッゲは、「韓国にはハンの文化がある。ハンとは単に恨むだけではなく、情の裏返しである。情があるからハが生まれ、恨んで、恨んで、恨んだところから情が生まれる」とボツリと言つた。これはムルッゲの持論かも知れないが、私の心にはズーンと響いた。この瞬間、「ハンの文化」の実像に触れたと思つた。



## 国劇記 中語公演

アジア文化祭  
での劇公演を  
終えて

情報文化学科3年

●  
三 富 勇 樹

私達中国語研究会は、今回初めて大学外での劇公演をし、観客の皆様の温かい拍手を土産に終えることが出来たことは、私達に大いなる自信を与えてくれた。

新潟県が主催するこのアジア文化祭は、アジア諸国との文化交流をテーマに二年に一度の活気にあふれる祭りであり、そこで「三国志」を披露することを依頼されたのだが、私達は最初は断つたのである。これほどの大舞台、大学外での公演、市民との触れ合い等々、初めてつくしであり、人様に見せられる程のものか、という懷疑心があつたが、皆の熱意によつて依頼をひき受け稽古を始めていった。

時が経つにつれて私達の緊張は高まり、一人ひとりの役づくり、声・より美しい中国語の発音の追求、演

技指導にも熱が入る。そこには一つの目標に向かい稽古に励む仲間、学年を超えた協力が生まれ、お互いに役づくりや演技、剣の振り方一つにしても話し合い、より素晴らしい劇を目指して力を合わせていった。

いざ本番当日を迎え最後の台詞合わせの時、多くの人が緊張からか台詞が流暢に言えなかつた。大丈夫なのかと心配が募るが時間は待つてくれない。衣装に着替え、舞台への道のりで人々の視線が集まると緊張感も頂点に達した。さあ本番の時が来たのである。

ところが本番になると、今までの心配事はどこへ行ったのだろつかと思えるくらいに全員が自信に満ちあふれた、迫力のある演技をしているのである。その素晴らしい声も発音も全てにおいて練習以上の力を発揮しているのがあつた。戦闘シーンでは、ステージを飛び出している演技が観客の方々を次々と魅了していったという手応えがあつた。

公演終了後の話では、我々の台詞が中国人留学生に理解してもらえたようである。私達の中国語がネイティブの人々に通じたこと、そして何よりも、公演直後の挨拶でのお客様からの温かい拍手は今でも忘れることの出来ない最高の贈り物となったのである。



## 湧 YUUGEN 源

編集後記に代えて

広報委員長 竹並 輝之

夏休み以降、本学では地域に開かれた大学を目指して、盛沢山の地域交流イベントを開催し、多くの地域住民や産業界の方々の参加を得ることができました。私も公開講座で講師を担当しましたが、参加者の方々が非常に熱心で、講義に対する反応の大きさに新鮮な驚きを感じました。話を聞きながらうなずいてくれる、質問が出る、冗談を言うなど、大学の授業では体験することの少ない反応がありました。本学の学生にもこのような態度を期待したいと感じました。

地域交流イベントに多くの方々に参加していただくために、広報委員会ではいろいろなメディアを使って広報活動をしました。初めてのことであり、どのような効果があつたのか不安でしたが、公開講座の参加者30名にたずねたところ、次のような結果が得られました。公開講座を知つたのは、車内ポスター10名、チラシ4名、市報5名、新聞2名、インターネット1名、その他3名。これらを参考に地域の方々に新潟国際情報大学を理解していただくための、より効果的な情報発信活動を考えていきたいと思っています。

本号では、学外実習体験記を特集しました。最近、インターンシップという呼び方で、在学中に社会を実体験することが望ましいと文部省も推奨していますが、本学情報システム学科では、開学以来地域企業の協力を得て、3年夏休みに学外実習をカリキュラムに組み込んできました。学外実習を終えた後、机上で勉強してきた授業の意味が実感でき、授業に興味が出てきたという学生も多く、勉学意欲の向上や進路の決定によい効果を与えていると思います。もっと早い時点で学外実習を体験したかったという声も聞かれています。